

I オレデシュ川沿いの村

1

村の教会の入り口の真正面には水つぼい泥だまりがある。その上に何枚かの板が渡してある。マリヤばあちゃん板っこ、と言っていた。カマローヴァはおばあちゃんが好きだった。おばあちゃんが生きていた頃は、夕方には長いこと並んで座り、共産主義者たちについてのごちやごちやした話に耳を傾けたものだった——おばあちゃんには忘れっぽくて、名前と日付を色々取り違えながら、同じことを繰り返して話していた。お葬式の後、カマローヴァは頻繁に墓参りに行っていた。墓は教会の周りの墓

地にあった。マリヤばあちゃんは共産主義者で、神様を認めていなかったから、お墓の十字架には赤い星がぞんざいに描かれていた。折衷式だ。セルギイ神父は特に反対していなかった。「神はすべてをお赦しになる」というわけで、墓地にはそういう十字架と星のついた墓もいくつかあれば、全然十字架のないようなものもある。木かブリキの板を打ちつけた柱だけが突っ立っているようなのが。もう秋だったが、墓地は鬱蒼と茂ったイワミツバとタンポポの中に沈んでいる。そして、そこに背が高くてしっかりしたアザミの茎が見えている。教会の猫のワシカは人に無関心だ。教会の入り口の階段に座っていたのが、カマローヴァに気がつくくと、耳をぴくっと動かして大きくあくびをした。

「ワシヤ、ワシシカ、チツ、チツ、チツ……」身を屈めて、地面のすぐそばで指を振りながらカマローヴァは呼んだ、猫が遊んでくれるように。だがワシカはもう一度あくびをしただけで、つりあがった目を閉じるとまどろみはじめた。

「なにさ、遊びたくないっての。それなら座ってな、赤毛のバカ猫」カマローヴァは体を起こして、スカートの裾を払った。それから板の方に歩いていき、しばらくし

やがんでいたが、勢いよく立ち上がった。板と板の隙間に、濃いこげ茶色の泥がにじみ出た。

「落ち着きのない子だねー」背の高い女が、教会から出て来ながら腹立たしげにカマローヴァをたしなめた。

「ここをぐちゃぐちゃにしちまうがいいさ！ まだ汚し足りないってんならぬ！」

近くを通り過ぎる時、女は危うくカマローヴァを泥だまりに落としかけたが、すぐにカマローヴァの肩をつかんで押さえると、顔を教会の方に向け、ゆっくりと十字を切り、お辞儀をしはじめた。女の唇は音もなくかすかに動いていた。これはニーナおばさん、短く言えばニンカ、自分の夫が酔って家に帰ってくると叩くことで村じゅうに知られている。ほかの多くの女たちはこのことでニンカを責めていたが、ひそかに羨ましがってもいた。

カマローヴァはニンカにあっかんべをしてみたくなった。教会の中は薄暗くて良い匂いがしていた。アイコンのあたりで、何人かの信者が低く頭を下げて立ち、祈っていた。カマローヴァの一番気に入っていたのは奇蹟者ニコライのアイコンだった。セルギイ神父が、聖ニコライは子供たちを庇護してくれると言ったからだ。それでカマローヴァは、自分にできる仕方、寝る前にこの聖者に祈

っていた。自分の二人の弟と、四人の妹、中でもレンカのために。ずいぶん前から自分のことを大人だと見なしていたから、自分のためには祈らなかつた。ニコライのアイコンの周りには誰もいなかったたので、カマローヴァは近づいて行き、頭を後ろに反らすと、心の中で祈りをあげながらじつと動かなくなった。

「またプラトク*をかぶらないで？」セルギイ神父は厳しければと責めるのではない目で見た。

「だって……」

「何だね、またなくしたのかい？ まったくどうしたものかな、聖エカテリーナのしもべさん？」

カマローヴァは鼻を鳴らした。神父の奥さんのタチヤナに今週もらった白いウールのプラトクは、レンカにあげてしまった。ところがレンカはそれをなくした。一昨日カマローヴァはそのことで妹を長い枝で打ちのめした。それで今では恥ずかしかったのだつた——もらったプラトクをやったことも、長い枝の鞭のことも。

「だってさ……なくしちゃった……」

「まったく……」

「だってなんでもかんでも目を光らせとくわけにいかないじゃない、やるのがたくさんあるんだから」カマロ

ーヴァは少し赤くなった。

セルギイ神父は司祭としては比較的若い方で、四十五歳はいつていなかったが、肥満と何やら早すぎる肉体的疲労のために、年よりも老けて見えた。自分のところには子供がなかった。タチヤナはそのことでよく泣いていたし、カマローヴァ家の両親のことを思い浮かべながら、こう言っていた。アルコール狂にはみんな神様が子供を授けたのに。生みの母親が死ぬまで、好き放題罵っていた、良心のないミーシカにも……七人の子供たちは村じゅうをうろついて、野原の雑草みたいに育っているのよ。セルギイは、ぶつぶつ不平を言うことの罪や、神のみちびきは人には理解の及ばぬものであること、あらゆる試練が神から与えられることなどを説明して、できる限り妻をなぐさめていた。すると妻は落ち着いて、しくしく泣くと、掃除をはじめめるか、台所へ入って行くのだった。

「じゃ、ほら……」セルギイは祭服の下の深いポケットに手を入れて、いくつかの〈クルフカ〉^{*＊}を取り出した。「失くさないね？」

カマローヴァはフンと言うと、スカートのポケットにお菓子をしまったが、ひとつはすぐに包みを剥いて口に

放り込んだ。〈クルフカ〉は新しかった、口の中に濃い甘いトフィーが広がった。

「祈りに来たのかね？」

カマローヴァは、お菓子のせいで話せないようなふりをした。セルギイ神父はため息をつくとき、カマローヴァに十字を切って自分の仕事に戻ろうと手を上げた。

「神父さん……」

ろうそくが静かにばちばちと音をたて、蠟が垂れ落ちるのが聞こえた。カマローヴァはこの溶けて固まった蠟を集めては、手の中で温め、玉を作っていた。

「あたし用があつて来たんだ。問題があるの。良くないことなんだよ」彼女は口ごもって、また黙り込んだ。

セルギイは待つていた。彼の右手の指は十字を切るうとしたままの複雑な形で固まった。

「神はすべてを赦してください」

蠟でできた玉を、レンカはお茶を入れる箱に隠してい

* ロシア風のウールのストール。

*＊ 柔らかいキャラメル様の菓子。中に液状のトフィーが入っている。ポーランド人のフェリックス・ボモルスキー（一八九五—一九六三）が考案し、第二次世界大戦後ドイツ民主共和国、チェコスロバキア、ソヴェト連邦などで生産され、ヨーロッパ全土に知られるようになった。

た。その後で、玉を寄せ集めて手と足のある小さな人間を作った。目の代わりには燃え尽きたろうそくの先端を置いた。母親が小さな人間を見つけて捨てた。レンカは長い間泣いていた。

「好きな人が出来たんだ」

セルギイは顔をしかめた。少し考えてから言った。

「それは罪じゃないよ」

レンカは泣いていたので、母親は娘の後頭部をさんざん叩いた。

「あたしより年上なの」

セルギイはまた黙った。妻のタチヤナは自分より十四歳も年下だったが、どうということもなく、それなりに暮らしている。

「ずいぶん上なのかね？」

カマローヴァは鼻を鳴らした。

「分かんない。六つ上かな。もしかしたら、八つかも」
タチヤナは時おり台所に閉じこもるのだった。そういう時セルギイはつま先立って台所のドアに近寄っては、耳を澄ませてみた。とても静かだったが、次第に、タチヤナが突然深く息を吸いこんだり、すすり泣いたり、うめき声をあげたりするのが聞こえてきた。ドアの隙間か

らでは、ほとんど何も見てとれなかった。夫を心配させないようにと、タチヤナが電気をつけなくて、代わりにろうそくを灯していたからだだった。村で犬が夜遅く通り過ぎる人に吠えはじめた。遠くの街道を一台の車が通って行ったり、木材を積んだ長い大型荷馬車が轟音をたてたりした。ペチカの後ろでコオロギがちりちり鳴いた。タチヤナは立ち上がると、ティーポットから湯冷ましの水を注いで、大きく一口飲む。セルギイも、ドアに近づいた時と同じように慎重に、部屋へ戻るのだった。

「その彼のことを、まさか、神様よりも好きなのかな？」
カマローヴァは目をあげて、驚いたように何度かまばたきをした。白茶けた金髪の頭を振った。

「違うよ」

「もしそうだとしても、それも罪じゃないさ」セルギイ
神父は言い結んだ。

彼は三度カマローヴァに十字を切ってから、頭を撫でた。カマローヴァは再び目を落として、床をじっと見た。泣きださないくれればいいが。人の涙をどうすればいいか知っているのは、神ひとりだけなのだから。

「ほかにまだ何か話したいことは？」
「何も」

泣く時、レンカは体中を震わせて、手で頭を抱え、汚れた指で髪のをかき集める。そんな風に泣くのは小さな子だけだ——大人は音をたてずに泣く。泣いているとすぐには分かりさえしない、単に涙が頬を伝う、それだけだ。このことをカマローヴァはよく知っていた。弟妹のうちの、小さい子たちが大声で泣くと、母親はいつも腹を立て、下唇を噛みしめて黙ったまま子供を殴った。ただオリカのことだけは、あまりにバカなのでふびんがついていた。もうすぐ十歳になるというのに、話し方もとうとう覚え、誰もがオリカにはもうずいぶん前にさじを投げた。その代わりレンカとカテリーナには容赦なかった。何かしでかしたと言つては猛烈にひっぱたいた。

「本当に何も？」

「そう言ったじゃない」

セルギイは聞きかたかった。「彼の方はお前を好きなかね？」だがどきまぎして、心の中で自分を罵った。まだ子供なのだ——分かるはずがない。

「それじゃあ、神のご加護を」

彼はうっかりしてもう一度カマローヴァの頭を撫でると、ゆっくりと向こうへ立ち去った。

教会に通ってくるのはたいい女性だった。女性信者の数は多かったが、彼女たちの話す内容といったらせいぜい二つか三つしかなかった。若い女なら、誰かを好きになった。夫が酒飲みの放蕩者で、殴る。もしくは、夫なしに一人で家のことをこなすのが大変だ、あそここの傭が傾いだのに誰も修理してくれない、ところが自分にはもうその力もないし、と、老婆であればこんな具合だ。神を信じている者は少なかった。神は寛大だが、黙つてばかりいる、必要なのは神父と生きた人間の言葉の方だというので。若い頃セルギイはペテルブルクへ行き数学・力学部に入學したかったのだが、父親が自分の息子は聖職者の道を行くべきだと主張した。セルギイは身を屈めると、誰かが落としたりした『健康になりますように』という書きつけを拾い上げた——と、そのとたんに背中に痛みが走った。

カマローヴァは神父が至聖所に隠れるのを待つてアイコンのもとへ走り寄った。誰かに気づかれはせぬかと恐れながらあたりを見渡すと、蜂蜜の香りのするろうそくから流れてたまった蠟を素早く集め、ポケットに突っ込み、教会から飛び出した。そしてとうとう道にたどり着くまで、止まることも振り返ることもなく走って行った。小

さな丘の上に立つ教会はとても古く、壁の赤いレンガはぼろぼろになりはじめていたので、周辺の地面が赤みがかって見えた。

マリヤばあちゃんは、三七年にポリシエヴィキが村のアレクシイ神父を銃殺した、と言っていた。おばあちゃんはその時小さな娘で、たぶんレンカよりも年幼かつたはずだけれど、すべてを見た、と言っていた——教会にはキイチゴが茂っていて、子供たちはそれを集めて回っていた。年寄りで総白髪のアレクシイ神父は教会から連れ出され、何度かつまずき、その後完全に転んだ。神父は立たされて、膝立ちにさせられ、教会の前で銃殺された。おばあちゃんはキイチゴの陰からこうしたことを全部見ていたのだ。カマローヴァ自身もアレクシイ神父と何度か出くわしたことがあった。教会に錠がおろされる夕方の遅くに、全身白づくめでびっこを引いて現れるのだった。なぜなら神父はまず脚を撃たれて、その後で頭を撃たれたから。これはおばあちゃんがカマローヴァに言ったことだが、神父を撃つたのはまったくの少年で、二番目に年配の男が撃ち、銃の扱い方を心得ていないと言つて後でこの少年を怒鳴りつけたらしい。アレクシイの湿った白髪の手が額にはりついていて、カマローヴァ

は呼びかけたが、神父は振り向かなかつた。この話をした時、母親は娘の顔を力任せに殴りつけて、夜ごとに行きあたりばったりにうろつくようなまねは絶対にしないように言った。

カマローヴァは埃っぽい地面につばを吐くと、手をポケットに突っ込んで、温かい蠟の塊に触れた。墓地では木々が風に揺れ、静かにきしむ音をたて、どこかでキツツキがこつこつと木をつついていて、彼女は目を細め、ちらつく木の葉の中に鳥の姿を見定めようとしたが、何も見えなかつた。夕方になるにつれて暗くなりはじめた空は雲に覆われ、雨がぼつぼつ降っていた。カマローヴァは身をすくめ、ポケットからお菓子をもうひとつ取り出すと、包みを剥き、口の中に放り込んで道をのろのろと歩き出した。空腹で食べたかったのだが、トフィーで口の中は甘つたるく、うつつうしくなつただけだった。スヴェートカが、彼氏のパーヴリクと一緒にこちらへ歩いてきた。スヴェートカは町の子だったが、村に別荘を借りていたわけではなく、おばのジーナのところ暮らししていた。そして毎回、ほとんど九月の半ばかりいまでも長居するのだった。カマローヴァは歩調を早め、スヴェートカに追いつき、裾を引つつかむと、一気にスカ

トをまくり上げた。引つ掻き傷だらけの日焼けしたスヴェートカの脚と、レース飾りのついたパンツがむき出しになった。カマローヴァは一目散に走り出した。スヴェートカがいきいきい言いはじめた。安全な距離まで走って、カマローヴァは振り返った。パーヴリクは彼女を追ってこなかった。スヴェートカが裾を直すのを手伝っていた。「びんぼつくさい女！」カマローヴァは叫んだ。

「そっちこそ！」

「パーカ！ 蚊^{カリツツ}女！」パーヴリクがスヴェートカに味方した。

カマローヴァは身を屈め、地面から石を拾い上げた。パーヴリクは後ずさりをはじめた。

「なにさ、あなたこのアマについて町に行くつもり？」

「たぶんな、それがどうした、うらやましいのかよ」

カマローヴァはねらいをつけずに石を投げた。石は、白くて軽い埃の雲を巻き上げて道に落ちた。スヴェートカの悲鳴が聞こえた。

「あなたなんか、町で誰が欲しがるもんか！」

スヴェートカは彼氏をかばおうとしたが、唇を噛みしめると、パーヴリクの手をつかんで向こうへ引つ張った。カマローヴァは肩をすくめ、向きを変えた。雨は強

さを増しはじめ、襟首から入り込んだ雨粒が背中を伝い落ちた。この秋は、学校に行かなくてもいい、初めての秋だった——カマローヴァは七年生はどうにかパスしたが、八年生には上がれなかった。何よりどうしようもないほど家事がたくさんあった。レンカはそもそも四年生で勉強を投げ出してしまい、五年まで行きつけもしなかったが、誰も何も言わなかった。母親は黙って手を振っただけだった、いわく、「バカ。正真正銘のバカだわ、一言一言区切って読むのを覚えただけでもありがたいくらい」。学校がないのはよかった。誰も宿題をやったか聞かないし、黒板の前に出されて答えを書かされることもない。それでもやはり、少し退屈だったし、この先どうなるのかよく分からなかった。セルギイ神父は例によって、「罪じゃない、それは罪じゃない」。カマローヴァは、セルギイの妻のタチヤナのところへ夜ごと悪魔が通ってくる、ニーナがアレヴチナに話していたの聞いた。アレヴチナは賛同して、「来てるわ、来てるわよ。煙突を通ってきたり、窓から忍び込んだりして」と言っ

* 古くからあるロシアの姓「カマローヴァ」は「蚊」（カマル）という言葉から派生している。

ていた。悪魔の尾は長く細く、縄みたいだったが、しっぽの先には、牛の尾のようなふさがあったのをこの目で見た、とも言った。でもあのバカ女が言っていることは全部嘘なんだ、そんなものは何一つ見ていやしない。第一、悪魔が通っているなら、その家の人たちはゆううつになって、痩せて悲しげになる。でもタチヤナを見ればいい、つやつやと顔色も良くて楽しそう。第二に、悪魔が来ているなら首に青いあざが必ずできるはずだ。なぜなら悪魔が女のもとへ近づく時には、その女の首を絞めるものなんだから——最初はまるで遊んでいるみたいに、それからだしぬけに力を強めて、絞め殺すのだ。でもタチヤナの首にはあざなんてない。白くてきれいで、毎週風呂場で首を洗ってでもいるんだらう。カマローヴァは湿った髪に指を滑らせると、頭を後ろへ反らせた。大粒の雨が彼女の額と頬を打った。

「カーーチ！」道沿いの茂みのどこからレンカが飛び出した。裸足で、もちろん脚も汚れている。泥だまりの真ん中に立った。

「なんで靴はいてないの!」カマローヴァは答えて叫んだ。「脚が凍っちゃうよ!」

「凍らないもん、たぶん」レンカは近づくと袖で脚をぬ

ぐった。「まだあったかいもん」

「あったかいもん、あったかいもん」ね、鼻水垂らしてさ」カマローヴァはからかって口まねをすると、ポケットに手を入れてレンカに二つ(ヘルフカ)を渡した。

レンカはすぐさま包みを剥くと二つとも口に押し込んだ。「おばあちゃんのとこに行ってきたの?」

「口にももの入れてもごもご言うんじゃないよ」
「でも行ってきたんでしょ?」

「行ってきたよ」

「おばあちゃん、なんつってた?」

「もうだいぶ前から、あんたに罰を与えるべきだったってさ。鞭でお尻をぶつんだよ」

「一昨日もうぶたれたよ」
「少なすぎたってことだよ、つまり。もっとぶたなきゃいけないんだ」

レンカはそっぽを向くと、顔をしかめて黙り込んだ。「サーニヤが朝から歯が痛い。うーうー言ってるよ」

「准医*のとこに連れてかなきやいけないんだ」カマローヴァは、膝まで泥がこびりついたレンカの裸足の脚を見つめた。まだあったかいだって、どうだか……秋の靴が惜しくて、しまい込んでるんだ。